



Data

監督・脚本：園子温
 原作：園子温『希望の国』（幻冬舎文庫刊）
 出演：夏八木勲／大谷直子／村上淳
 ／神楽坂恵／清水優／梶原ひかり／筒井真理子／でんでん／菅原大吉／山中崇／河原崎建三

👁️👁️ みどころ

『ヒミズ』（12年）に続く本作で、園子温監督は原発事故による警戒区域の設定に注目し、そこから生まれる人間ドラマに挑戦！神楽坂恵を起用しながら色気抜きとなった社会派ドラマは少ししんどいが、原発事故のドキュメンタリー映画ではない本作は見応え十分。

3つの家族の生きざまはそれぞれ教訓的だが、頑固親父がラストに見せる決断には当然賛否両論が。また、『希望の国』というタイトルを、あなたはどうか解釈？



■□■園子温監督の、大震災と原発事故への向き合い方は？■□■

2011年の3・11東日本大震災と福島第一原発事故は未曾有の大惨事だったが、それは同時に映画人に対して映画制作への新たな意欲を生み出した。報道における大震災と原発事故の映像はリアルさを追求するものだから、ドキュメンタリー作品としてはともかく、それがそのまま映画になるものではない。震災をテーマとした映画づくりのためには、様々な工夫が必要だ。しかし東日本大震災における津波被害の大きさをリアルに伝える報道映像をみれば、日本での公開中止となったクリント・イーストウッド監督の『ヒア アフター』（10年）の冒頭にみる津波の映像（『シネマルーム26』123頁参照）や、公開延期を余儀なくされた『のぼうの城』（11年）にみる備中高松城やのぼうの城への水攻めの映像が、日本国民に容易に受け入れられなかったのは仕方がない。

そんな状況下で東日本大震災と福島第一原発事故をテーマとしたドキュメンタリータッチの映画がたくさんつくられたが、異色だったのが園子温監督の前作『ヒミズ』（12年）。大震災の被害を受けた川沿いの貸ボート屋の息子を主人公としたこの映画は、『愛のむきだ

し』(09年)、『シネマルーム22』276頁参照)、『冷たい熱帯魚』(10年)、『シネマルーム26』172頁)、『恋の罪』(11年)、『シネマルーム28』180頁参照)と立て続けに世間をあっと言わせた園子温監督らしい視点で、あの大地震後の人間模様が描かれていた。そこでは何度もくり返される「住田、頑張れ!」のフレーズが印象的だった(『シネマルーム28』210頁参照)が、さて園子温監督の最新作『希望の国』における原発事故への向き合い方は?

■□なるほど、こんな設定に!■□

私は映画を観るについては事前にストーリーを読み資料を読み込んでいくタイプだが、本作においてはごく一般的な情報のみとどめ、あえて事前の情報収集の努力をしなかった。したがって、映画冒頭に表示される地名をみて、しばらくアレレ……。

映画はまず、長島県大原町で酪農を営んでいる小野泰彦(夏八木勲)・智恵子(大谷直子)夫妻、その息子・洋一(村上淳)・いずみ(神楽坂恵)夫妻の平穏な日常生活を描いていく。その隣で野菜づくりをしているのが鈴木健(でんでん)・めい子(筒井真理子)夫妻とその息子・ミツル(清水優)。隣町の大葉町に住む恋人のヨーコ(梶原ひかり)とつきあっているミツルは、小野夫妻の一人息子・洋一と違って今は遊びほうけているようだが、泰彦の見立てによればそのうちしっかりしてくるだろうとのこと……。大原町は過疎化が進んでいるはずの地方都市だが、この様子を見てると鈴木家の野菜づくりの承継はともかく、小野家の酪農家の承継は大丈夫そうだ。そう思っていると、突如ゴーという地鳴りとともに長島県東方沖でマグニチュード8.3の大地震が発生。さらにその後、長島第一原発で水素爆発が。幸い小野家や鈴木家の建物は損壊だけは免れたものの、放射能汚染の広がりとは?また、津波被害を受けたお隣の大葉町の状況は?ヨーコの両親は?

本作全体を通じて大きな存在感を示すのが小野泰彦と認知症を患っているその妻・智恵子だが、彼らがくり返し交わすセリフの中で、あれほど反対したのに結局は長島第一原発が完成し稼働を始めたこと、2011年の3・11東日本大震災における津波や福島第一原発事故の反省と対策にもかかわらず、再び20XX年の今、長島県でこんな大災害が起



新宿ピカデリー、ヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開中!
© 2012 The Land of Hope Film Partners

きたらしいことがよくわかる。映画はしよせん虚構の芸術だから、自由にいろいろな世界を想像できるのが強み。しかして園子温監督は、なるほど、こんな設定に。これなら誰でも一方では3・11東日本大震災に思いをめぐらせながら、他方では全く架空のストーリーとして受け止めながら（？）、スクリーンを見ることができははずだ。

■この不合理、この不条理に怒りを！その思いは同じ！■

私は、震災から41日後の2011年4月22日の締切で民法法研究会の雑誌『市民と法』69号（2011年6月号）に「東日本大震災にみる不動産と復興計画・復興立法をめぐる諸問題」と題する論文を書いた。また朝日新聞が募集した5月10日を締切とする「ニッポン前へ委員会」東日本復興計画私案論文に「震災復興担当大臣を国民投票で！」と題する論文を出した。これに加えてさらに、新日本法規出版の『わかりやすい都市計画法の手引』や『Q&A災害をめぐる法律と税務』等の原稿を執筆する中で、一貫して災害対策基本法にもとづいて半径〇〇km内を〇〇区域に指定することの不合理性と不条理性を考えてきた。そんな私の目には、大震災から数日後のある日、町役場の職員たちが突然防護服姿でやってきて、小野家の庭に杭を打ち込み、テープをはり、立入禁止の看板を立て始める姿は、小野家や鈴木家の人々の目と同じよう不合理、不条理に見えた。これは原発から半径20km圏内が「警戒区域」に設定されたことに伴う法的措置だが、たまたまその線が小野家と鈴木家を隔てることになったため、警戒区域外となった小野家は家に残れるのに対し、鈴木家は避難所行きを余儀なくされたわけだ。

2011年の3・11東日本大震災から40日後の4月21日、原子力災害対策本部作成の「警戒区域の設定について」と題する書面にもとづき、原子力災害対策本部長たる内閣総理大臣は、原発事故が起きた福島県や同県内の市町村に対して警戒区域を設定し、立入禁止と退去を命ずる「指示」を出した。そして、この「指示」を受けて各市町村は福島第一原子力発電所から半径20km圏内を「警戒区域」として設定するとともに、緊急事態応急対策に従事する者以外の者の立入りを禁止した。これは、原子力災害対策特別措置法第28条第2項により読み替えられる災害対策基本法第63条第1項の規定にもとづくものであり、また内閣総理大臣の「指示」は災害対策基本法第20条にもとづくものだ。

他方、この4月21日の警戒区域の設定に至るまでの原子力災害対策特別措置法第60条1項にもとづく「避難指示」等の経緯は、

- ①3月11日 福島第一原子力発電所の半径3km圏内に避難指示
- ②3月11日 福島第一原子力発電所の半径3kmから10km圏内に屋内退避指示
- ③3月12日 福島第一原子力発電所の半径20km圏内に避難指示
- ④3月12日 福島第二原子力発電所の半径10km圏内に避難指示
- ⑤3月15日 福島第一原子力発電所の半径20kmから30km圏内に屋内退避指示
- ⑥4月21日 避難指示の対象区域について、福島第二原子力発電所の半径10km圏内から半径8kmへ変更

と、大きく混乱しているが、ここではその詳細は述べない。

かつては、西ドイツと東ドイツの間に「ベルリンの壁」が築かれたし、今でも北朝鮮と韓国の間には38度線（停戦ライン）で厳重に線引きされている。これらを含め、国と国との国境を定めるために線引きするのは仕方ないが、空气中を散乱する放射能の危険から逃れるために原発から半径0kmで線引きをする合理性は一体どこにあるのだろうか？本作はその本質的な問題点（不合理性と不条理性）を突きつけてくれる。さあ、こんな不条理な線引きによって引き離された小野家と鈴木家に待ち受ける人間ドラマとは？

■□■メインは3つの家族が紡ぎ出す物語■□■

「警戒区域」についての法的説明が長くなったが、本作を理解するためには災害対策基本法が定める罰則についてもある程度理解しておいた方がいい。災害対策基本法第63条第1項によって市町村長に警戒区域の設定権等が付与されるわけだが、ここでは同時に災害応急対策に従事する者以外の者に対して当該区域への立入りを制限し、若しくは禁止し、または当該区域からの退去を命ずることができる、と定めている。そして、これに違反した者には10万円以下の罰金または拘留に処せられる（同法第116条第2号）から、いくら警戒区域の設定に納得がいなくても、あるいは本作にみるようないかなる事情があろうとも、違反行為はできないことになる。ところが、園子温監督が描く本作では・・・？

本作が描くメインは、大震災後に3つの家族が紡ぎ出すストーリー。「地震、雷、火事、おやじ」と昔から地震は怖いもののトップに置かれているが、今回はそれに原発事故が加わったから大変。さて、弾もミサイルも見えないけど、そこらじゅうに弾やミサイルが飛び交っている「見えない戦争」状態に否応なく置かれた3つの家族の物語とは・・・？



新宿ピカデリー、ヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開中！ (C) 2012 The Land of Hope Film Partners

■この頑固親父のスタンスをどうみる？■

父親と息子の絆を描いた映画は多いが、日本ではそれは次第に失われているのが実情。しかし、長島県大原町では小野家も鈴木家も形こそ違え、まだ根強くそれが残っているらしい。本作に見る泰彦と洋一父子の絆は少しベタベタしすぎでは？と思えるほど親密だが、大震災直後の泰彦と洋一間の論点は、大原町に残るべきか否かということ。泰彦の主張は「俺はもう老人だから今更多少の放射能を浴びるのは問題ないが、これから赤ちゃんを産むいづみとそれを守るべき立場の洋一は、今すぐに放射能の危険があるこの家を離れろ」というもの。洋一は泰彦の主張には納得するものの、「それなら親父も一緒に」とどうしても情緒的に考えてしまうようだ。多分、現実には泰彦と洋一の主張はそれほど大きく食い違うものではないのだろうが、園子温監督はあえてその違いを際立たせることによって放射能の危険性についての考え方の論点を明確に示していく。

被災地に住む一人一人が自分の力で放射能の危険性を判定することはできないから、それに代わって国が「原発から半径〇〇km圏内を警戒区域に」という「線引き」をしてくれるわけだ。そう考えれば被災民は黙ってそれに従えばいいのだが、泰彦のように「国の言うことなんか信用できるか！」と思う人はどうすればいいの？洋一は泰彦の説得に従って安全な町(?)に避難したものの、泰彦はその後、牛舎にいる牛たちへの「殺処分命令」が下され、さらに泰彦・智恵子夫妻への避難命令が届けられてもなおそれに従おうとしなかったから、町役場の職員である志村(菅原大吉)と加藤(山中崇)はその説得に苦しむことに。

日本は法治国家だから、法の下での平等は絶対に動かせないことはわかっているものの、原発の爆発事故による放射能被害については、何でもかんでも法律で規制するのではなく、どこに住むかについては個人の自由な選択を認めてもいいのではないか。ずっとそんな風に考えてきた私としては、本作で泰彦の考え方を全面に押し出してくれた園子温監督に拍手！しかし、さてあなたはこの頑固親父のスタンスをどうみる？

■いずみの行動は異常？それとも周りがヘン？■

『恋の罪』で大胆なヌード姿を披露してくれた神楽坂恵には唖然としたが、2012年3月4日に開催された「おおさかシネマフェスティバル2012」の助演女優賞授賞式で間近に見た彼女は当然ながら普通のキレイな女優さんだった。本作で神楽坂恵に「その手」の期待をするのがムリなことは最初からわかっている。しかし、本作でも彼女は冒頭にみる酪農一家の若嫁という姿から、中盤以降は防護服に身を固めたおなかの赤ちゃんを守るための女闘士に変身していく姿を見せてくれるからそれに注目。いずみは原発に強く反対する泰彦の影響を受けていたわけではない。いずみが突然そのように変身したのは、妊娠5週目と告げられた後に避難した町で、産婦人科医(河原崎建三)から、医師たちがテレ

ビで語っている放射能に関する情報はウソばかりだと聞いたためだ。いずみは妊娠によって変身する典型的な女だったらしいが、その徹底ぶりが面白い。ネット情報によると、放射性汚染防護用保護具には「低レベル用」と「中レベル用」があり、前者は19,400円、後者は39,800円で売られていたが、さていずみが購入した防護服のレベルは？放射能へのいずみのスタンスの大転換によって、洋一と一緒に住む部屋も外気をさそぎった密閉状態にされたが、これってどうやって換気を？そのあたりが私には不思議だし、そもそもいくらマスクをしても防護服を着ても、町全体の空気が放射能で汚染されていければ無意味だと思うのだが、さてこないいずみの行動は異常？



新宿ピカデリー、ヒューマンラストシネマ有楽町ほか全国順次公開中！ © 2012 The Land of Hope Film Partners

パンフレットにはライターの高田起夫氏の『「繰り返すこと」を繰り返す』というコラムがあり、そこでは黒澤明監督の『生きものの記録』（55年）が紹介されている。これは放射性降下物（＝死の灰）の恐怖に怯え、一族を説得し、安全といわれるブラジルに移住しようとする老工場主の物語で、当時35歳の三船敏郎が70歳の老け役に挑んだが、記録的な不入りで終わった作品らしい。そして、この作品では、「この患者を診ていると、何だか正気であるつもりの自分が妙に不安になるんです。狂っているのはあの患者なのか？こんな時世に正気でいられる我々がおかしいのか？」と語る主人公の担当医のセリフが有名な。高田起夫氏は、本作におけるいずみの行動を見て、『生きものの記録』のこのセリフを思い出したそうだが、このセリフのように異常なのはいずみ？それとも「喉元過ぎれば熱さ忘れる」のことわざどおり、きっと起きているであろう放射能汚染をあっさり忘れてしまっている周りがヘン？

■□■津波の被災地に立つ2人の子供たちは？■□■

本作では父親の鈴木健から「アホバカ息子」とののしられていたミツルが震災後、恋人のヨーコを守り独り立ちしていく姿も印象深い。津波被害に遭った大葉町に住むヨーコの両親は未だに行方不明。そこで、ヨーコは何度もその被災地に赴いて両親を探していたから、ミツルもトコトンそれに付き合うことに。この津波の被災地では、ミツルとヨーコが偶然出会う2人の子供たちの姿が面白い。なぜ、こんなところに子供たち2人だけで？そんな疑問をもったミツルとヨーコが子供たちに話しかけると、この付近にあった子供たちの家が津波で流されてしまったため、子供たちは大好きだったビートルズのCDを探しにきているらしい。何とマセた子供たちだとミツルとヨーコが笑いながら話していると、次の瞬間この子供たちは……。

この子供たちは一体ナニ？後述のように本作は『希望の国』というタイトルには以ても似つかぬ結末で終わるのだが、本作で唯一描かれる津波被災地でのこのメルヘンチックな世界は少し異質な感覚で味わってみたい。また『ヒミズ』では前述のようにラストでくり返される「住田、頑張れ！」のセリフが印象的だったが、本作ではその後立入禁止区域とされた津波の被災地をミツルとヨーコが「一歩、一歩」と叫びながら歩いていく姿が印象的だ。当初は今風の遊び人だったミツルも今やヨーコに対して「結婚しよう！」と言えるほど成長したが、ある意味これは大震災のおかげ。そう考えると、大震災だって絶望ばかりではなく、少しは希望も……。

■□■「うちに帰ろうよ」のセリフをいかに？■□■

本作では全編を通じて泰彦役の夏八木勲が圧倒的な存在感を示しているが、私のイメージでは個性的な演技派女優であり、かつては肉感的な魅力も誇っていた大谷直子も認知症を患う妻ながら大きな存在感を見せている。智恵子のように毎回ワケのわからないセリフをくり返されたら気の短い私なら気が狂いそうだが、今なお智恵子を愛している泰彦はあくまで智恵子に優しく寄り添っていた。そんな愛情をいっぱい受けて智恵子は泰彦と2人きりになった今も美しいお花畑づくりにいそしんでいるが、それが長く続かないことは明らかだ。

智恵子が決まって言うセリフは「お父ちゃん、帰ろうよ」と「うちに帰ろうよ」の2つ。たまたま移転交渉の席でそれを聞きつけた志村と加藤は勇んで「奥さんもこう言ってることだし」と畳みかけたが、その言葉が認知症老人の決まり言葉だと知ってガックリ。たしかに泰彦・智恵子夫妻にとって今さら帰るべき場所などあるはずはないから、どう考えてもこの言葉は空虚だが、ひょっとして園子温監督は智恵子が語るこのセリフに大きな意味を持たせたのでは？もしそうだとすると、さてこのセリフの意味は？それはきっと本作のラストで示される泰彦の決断に同意する智恵子の「意思」にもつながるはずだから、そこらあたりの解釈はあなた自身の目でしっかりと。



新画ビカデー、ヒューマンラストシネマ有楽町ほか全国順次公開中！ © 2012 The Land of Hope Film Partners

■ラストに向けての泰彦の決断は？その賛否は？■

泰彦の意思は国の判断や国の命令に関わりなく自分たち夫婦はずっとこの家で生活したいということだが、法治国家たる日本国がそれを許さないのは当然。牛の殺処分や強制退去命令の日が近づいてくる中、ラストに向けて泰彦が下す決断とは？

それが本作最大のテーマだが、私が少し納得できないのはそこに至るまで食事や牛の世話、お花畑の世話など、泰彦が智恵子と2人で平穏無事な生活を営んでいること。周囲に誰もいない孤立した警戒区域内での2人だけの生活はどうやったら成り立つの？お米はともかく、日々の野菜や魚や肉はどこで買っているの？電気、ガス、水道は平常どおり使えるの？この非常時に智恵子のために温かい鍋料理を作ってやっているシーンを観ていると、こりゃちょっと現実離れしすぎているのでは、と突っこみたくなったのは仕方ない。さらに、この時期になってなお牛の世話をしている泰彦の姿が描かれるが、そもそもそのエサはどこから仕入れているの？また、いくら牛の世話をしても放射能汚染という烙印を押された牛は売れるはずがないから、今泰彦がしていることは全く無意味なのでは？そんなイチャモンづけはともかく、『希望の国』という本作のタイトルとは似ても似つかぬ、ラストに向けての泰彦の決断には賛否両論があるはずだ。

ちなみに『キネマ旬報』11月上旬号では、上島春彦氏は星5つと高評価だが、星2つの北川れい子氏は、「終盤の夏八木の行動も疑問。妻は自分の所有物ではない」と手厳しく批判している。同氏の「前作『ヒミズ』同様、大震災を自分の映画の商売に使っているとしか思えない」との批判はともかく、ラストに向けての泰彦の決断についての、あなたの賛否は？

2012（平成24）年10月30日記